まとめ

今回の調査では、これまで造られた時期や石室などの情報がまったくなかった筆ヶ崎古墳群の内容の一端を明らかにすることができました。まだ調査が行われていない古墳についても、横穴式石室が存在しているとみてよいでしょう。こうした調査成果は、この地域の古墳群の様子や横穴式石室の特徴などを知る上で、貴重な手がかりになると思われます。また、古墳群が造られたおよその時期が判明したことで、周りに広がる同じ時期の集落との関係もうかがうことができるようになりました。どのような人々がこの地に古墳を築いたのか、より詳しく考えることができるようになるかもしれません。

加えて、思いがけず奈良時代の人々の活動の痕跡も発見することができました。筆ヶ崎古墳群付近では、南側の丘陵上で調査が進められている中野山遺跡や北山A遺跡など、飛鳥時代から奈良時代にかけての遺跡がいくつか調査され、その動向も明らかになりつつあります。奈良時代の工房と思われる施設の発見は、この地域が古代に大金郷と呼ばれていたこととも関係するのかもしれません。

今回の調査区の周辺には、まだ調査が行われていない区域がひろがっています。筆ヶ崎古墳群についても、その後の奈良時代の遺跡についても、今後の調査によってより詳しく内容や性格が解明されることが期待されます。ぜひ、今後の調査にもご期待下さい。

用語解説コーナー

円墳（えんぷん）
上から見た形が丸い古墳です。周溝も円形に掘られています。

金環（きんかん）
輪のような形をした古墳時代のイヤリングである耳環の一種です。耳環のなかでも、金色のものを特に金環と呼んでいます。銅などの金属を芯にして、その表面に金メッキをしたり金箔を貼ったりして作られています。

古墳時代（こふんじだい）
日本で古墳が盛んに造られていた、西暦250年から600年ごろ（約1400～1750年前）を古墳時代と呼んでいます。

周溝（しゅうこう）
古墳の周りに掘られた溝です。古墳を周りから区画するなどの意味があったと考えられます。

須恵器（すえき）
窯で焼かれた素焼きのかたい焼き物です。古墳時代に朝鮮半島からもたらされた技術によって作られ始めました。奈良時代や平安時代にも食器などとして一般的に使われていました。

土師器（はじき）
野焼きによって焼かれた素焼きの焼き物です。須恵器よりもやや軟らかく、煮炊きをする甕などとして使われました。

横穴式石室（よこあなしきせきしつ）
亡くなった人を葬るために石を積んで造った横穴のような部屋です。古墳時代でも後半に造られるようになりました。遺体を棺に入れ、この石室の中に納めました。

〔筆ヶ崎古墳群第２次発掘調査〕
調査委託：中日本高速道路株式会社　名古屋支社　四日市工事事務所
調査主体：三重県教育委員会　　調査担当：三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱ課
調査面積：750 ㎡　　調査期間：2011 年 9 月 20 日～ 2012 年 1 月 31 日（予定）

新名神高速道路埋蔵文化財発掘調査ニュース

新 あさけのいにしへ

No.5

2011 年 12 月

三重県埋蔵文化財センター
〒515-0325
三重県多気郡明和町竹川 503
TEL 0596-52-1732　FAX 0596-52-7035
http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/maibun/

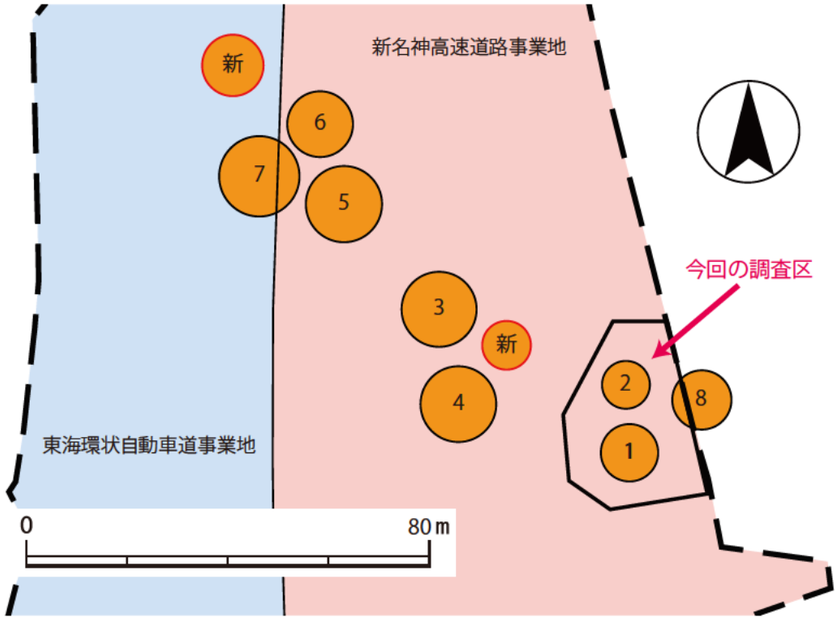
四日市整理所
〒512-8064
三重県四日市市伊坂町 126-1
TEL 059-363-3195　FAX 059-363-3196

筆ヶ崎古墳群で横穴式石室を発見！

２号墳の横穴式石室が出てきたときの様子です

はじめに

三重県埋蔵文化財センターでは、新名神高速道路と東海環状自動車道の建設に伴って、四日市北ジャンクション建設予定地の一角に存在する筆ヶ崎古墳群の発掘調査を行うこととなりました。筆ヶ崎古墳群は四日市市の北部に位置する小牧町の丘陵上にある古墳群です。これまでに古墳群が存在することは分かっていましたが、その詳細は不明でした。今回の調査では、2基の古墳について発掘調査を行い、古墳時代の終わり頃に造られた、横穴式石室をもつ古墳であることが分かりました。副葬品も出土し、この地域の古墳群を知る上で貴重な手がかりを得ることができました。



筆ヶ崎古墳群全体図　※○が古墳の位置を表します。数字は古墳の番号です。

調査前の古墳の様子（西から）

わずかな地面の盛り上がりから古墳の存在がわかりました。矢印が２号墳です。

筆ヶ崎古墳群について

筆ヶ崎古墳群は、朝明川（あさけがわ）の北側に位置する丘陵の、南向きのゆるやかな斜面に存在しています。以前より知られていた1～8号墳の8基の古墳に加えて、今回の発掘調査に先立って行われた踏査（とうさ）によって、新たに2基の古墳が確認されました。今のところ、この10基の古墳からなる古墳群と考えられますが、今後の調査によってはすでに削られてしまった古墳がみつかる可能性もあります。

古墳の形や大きさにはあまり違いはなく、いずれも直径が 10 数mほどの小さな円墳（えんぷん）と思われます。いずれの古墳も墳丘（ふんきゅう）の盛り上がりがやや低いため、後の時代に上部が削られてしまっているものと思われます。

10 基の古墳は、さらに3～4基の古墳からなるグループに分けられます。このグループに含まれる古墳は、ほぼ隣接して造られていますが、ほかのグループとは少し間をあけて造られています。北側のグループには4基、中央のグループには3基、そして南側のグループには3基の古墳が属しています。今回の調査では、このうち南側のグループに属する1号墳と2号墳を発掘調査しました。同じグループの8号墳については、墳丘のほとんどが調査対象となる土地の外側にあるため、西側のごく一部のみを調査しています。

奈良時代の筆ヶ崎古墳群の様子

古墳の周りからは、奈良時代のものと思われる遺構（いこう）もいくつかみつかりました。浅いくぼみ状のものや、溝状のもの、小さな穴などがみつかっています。

なかでも注目されるのは、SZ2と呼んでいるものです。この遺構は、一辺6mほどの四角形に地面を掘りこんで造られています。中央には直径 30 ㎝ほどの円形の炉（ろ）の跡（あと）があります。この炉は、非常に高い温度の熱を受けたようで、壁が硬（かた）く焼けています。この炉の周りの床面は非常に硬く固まっており、炉の周辺でなんらかの作業を行っていたと考えられます。また、内部に堆積（たいせき）した土には焼けた土の塊（かたまり）や、炭などが多く含まれていました。こうしたことからみて、SZ2は普通の住居ではなく、工房のような施設であった可能性が高いといえそうです。明確な証拠はまだみつかっていませんが、金属を加工するような工房ではないかと推測されます。

なお、SZ2は1号墳のすぐ東側に造られており、地面を掘りこむときに1号墳の墳丘を若干削っているようです。出土した土器からみて、SZ2は1号墳が造られてから 100 年近く後のものであると考えられます。古墳が造られてから 100 年後には、筆ヶ崎古墳群はすでに墓地として大切に受け継がれている存在ではなくなっていたようです。

ＳＺ２を掘っているところ

奈良時代の土器が出土した様子

ＳＺ２でみつかった炉のあと

出土した遺物

今回の調査で出土した遺物には、１号墳の石室内からみつかった金環とよばれる耳飾りがあります。同じくらいの大きさのものが2点みつかっており、葬られた人が両耳に一つずつ着けていた可能性が高いでしょう。金環は保存状態がよく、古墳が造られた当時の輝きを残しています。よくみると緑色のサビが表面に付着していますが、このことから、中まで金でできているのではなく、銅製のものを芯にして、その表面に金箔を貼りつけていることが分かります。

また、２号墳の周溝の中からは、多くの土器が出土しました。みつかった土器には、須恵器の高坏や壺などがあります。壺にはいくつかの種類のものがあるようです。短頸壺とよばれる小型のものや、広口壺とよばれるやや大型のものなどが確認できます。これらの2号墳の周溝内から出土した須恵器には、7世紀前半（1350 ～ 1400 年前）くらいのものが含まれています。おそらく、２号墳は7世紀前半ころに造られたのでしょう。

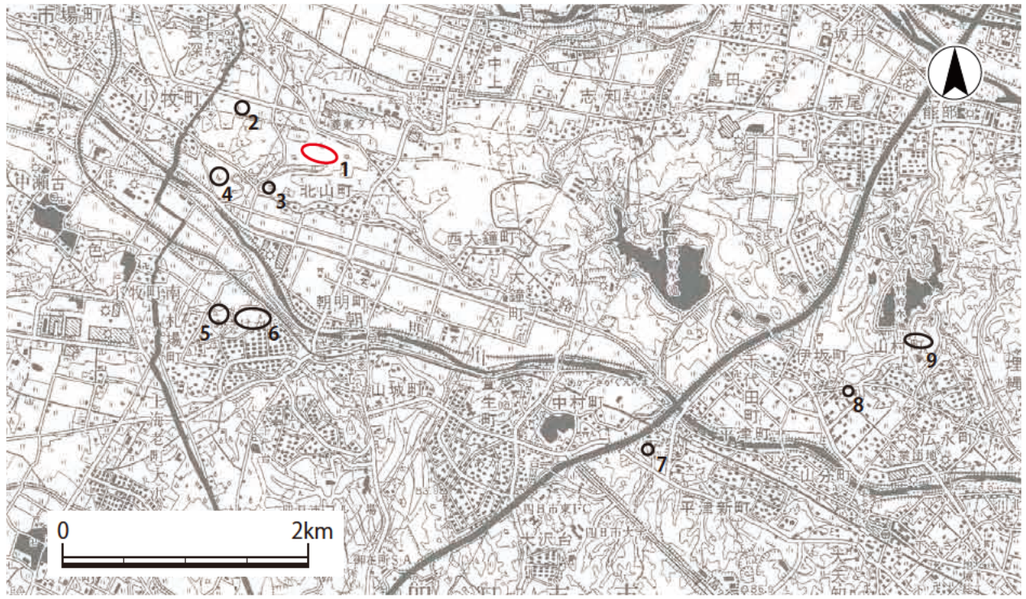
古墳の周りの遺構からは、奈良時代の須恵器や土師器がたくさん出土しました。須恵器には、つまみのついた蓋や、高台のついた坏などがあります。これらの須恵器は、8世紀（1200 ～ 1300 年前）くらいのものが多いと思われます。土師器は小さな破片となっているものがほとんどで、全体の形が分かるものはありませんが、甕が多いようです。

１号墳の石室内からみつかった金環

奈良時代の遺構からみつかった須恵器坏蓋

１号墳周辺からみつかった須恵器高坏

奈良時代の遺構からみつかった須恵器坏



１．筆ヶ崎古墳群　２．若宮古墳群　３．居林古墳群　４．門ノ上古墳群　５．持光寺山古墳群
６．鶯谷古墳群　７．八幡古墳　８．岡山古墳　９．金塚横穴墓群

筆ヶ崎古墳群の位置と周辺の古墳や古墳群

付近の古墳や古墳群

筆ヶ崎古墳群が位置している四日市市北部の朝明川の北側に位置する古墳群としては、筆ヶ崎古墳群のほかに若宮古墳群、門ノ上古墳群、居林古墳群などがあります。それぞれ約500mほどの距離をおいて分布しています。

若宮古墳群は現在1基のみ存在しますが、もともと周辺には10基ほどの古墳が存在していたようです。現在残っている古墳は筆ヶ崎古墳群と同様に横穴式石室をもっており、出土遺物としては須恵器の坏や鉄片、金環などがあげられます。

門ノ上古墳群は9基の円墳で構成されていたようで、そのうち1基は「王塚」と称されていたようです。この古墳も横穴式石室をもっているものと推定されますが、詳しいことは分かっていません。

居林古墳群は筆ヶ崎古墳群の南側に存在する丘陵の西端に築かれている古墳群です。2基から構成される古墳群で、いずれも小型の古墳です。墳頂部には、盗掘があったと思わせるくぼみがありますが、埋葬施設や出土遺物について詳しいことは分かっていません。

このように、筆ヶ崎古墳群の周辺にはいくつかの古墳群が存在しているものの、内容が詳しく分かっているものはありません。発掘調査によって実態が明らかになるのは、筆ヶ崎古墳群が初めてと言ってもよいでしょう。

いっぽう、朝明川南側の丘陵上には八幡古墳があります。八幡古墳の埋葬施設は横穴式石室で、残りがよいために形状がよく分かっています。丸い川原石を使っている点など、今回筆ヶ崎古墳群でみつかった横穴式石室と似ているところもあります。筆ヶ崎古墳群の横穴式石室を考える上でも重要な古墳です。

周溝の中から土器が出土した様子

周溝

古墳の周囲を調査した結果、古墳のまわりに溝を掘っていることが分かりました。こうした溝は周溝（しゅうこう）と呼ばれます。周溝が特にしっかりと掘られているのは、2号墳です。ほかの2基の古墳でも周溝は掘られていますが、浅くて分かりにくいものです。

2号墳の周溝は、古墳のまわりを全周していません。斜面の上方にあたる部分で最も深く掘られていますが、深いところでも30～40㎝ほどで、斜面の下方へいくにしたがって徐々に浅くなり、ついには消えていきます。どうやら、斜面上方の地形的に高い部分にのみ溝を掘り、墳丘（ふんきゅう）の高まりを造り出そうとしているようです。1号墳と8号墳も、2号墳と同じように斜面上方のみに周溝が掘られていると思われます。

なお、2号墳の周溝の中からは、たくさんの須恵器（すえき）や土師器（はじき）といった土器がみつかりました。これらの土器はいずれも破片となっており、もとの形を保っていませんでした。土器にまじって石室に使われていたと思われる石もいくつかみつかっていることから、後の時代に石室を壊した際に、石室の中に置かれていた土器を周溝の中へ投げ捨てたのかもしれません。

わずかに残っていた２号墳の横穴式石室の壁

横穴式石室

1号墳・2号墳ともに、横穴式石室が造られていることがわかりました。ただし、どちらの古墳の石室も大規模な破壊を受けており、残っているのはわずかな部分にしかすぎませんでした。どうやら、奈良時代に石室を破壊して石を抜きとっているようです。なんらかの理由で石が必要になり、手ごろなところにあった古墳の石室を壊して石を取りだしたのでしょうか。

今回発見された横穴式石室のもっとも大きな特徴は、角が丸い川原石を上手に積んで造られていることです。付近の河川敷などから石を運んできたものと思われます。こうした川原石を使って造られた横穴式石室は、三重県内では中勢地域から北勢地域にかけてみられるものです。県外でも、岐阜県の木曽川中流域や長良川中流域などでみられます。

1号墳の横穴式石室をみると、石室の壁の一部が内側へ突出していることがわかります。横穴式石室は、遺体を納める部屋である「玄室（げんしつ）」と、外から玄室へ入るための通路の役割を果たす「羨道（せんどう）」からなりますが、この突出部分が玄室と羨道との境目にあたるものと思われます。このことから、1号墳の石室は、玄室と羨道との境目の壁の両側に突出をもつ、「両袖式（りょうそでしき）」とよばれるタイプのものと推測できます。

また、2号墳の石室では、最下段（さいかだん）の石だけにやや横長の大きな石が使われていました。こうした石の積みかたは、この横穴式石室の特徴のひとつといえます。今後、ほかの古墳群の横穴式石室と造り方を比較していくうえで、手がかりとなるかもしれません。

石室の中から副葬品（ふくそうひん）はほとんど出土しませんでしたが、1号墳の石室内からは金環（きんかん）が2点出土しています。この金環は、石室が壊された後にできた穴を埋め戻したときの土の中にまじっていました。もともとは、この古墳に葬られた人物が着けていたものであったと考えられます。